一般社団法人 日本アート評価保存協会

スペシャル対談

ゲスト：

河合　正朝
一般社団法人 日本アート評価保存協会 代表理事
慶応義塾大学 名誉教授

安村　敏信
一般社団法人 日本アート評価保存協会 事務局長
北斎館館長

インタビュアー：　井田　智美
一般社団法人 日本アート評価保存協会 事務局

井田：
はじめに、日本アート評価保存協会の普段の取り組みを教えてください。

安村：
普段は、日本美術というものを身近に感じてもらって、好きになってほしい、そのためのひとつに、毎月スペシャルトークを開催しています。美術界のいろいろな動きを一般の方々にわかりやすくお話しすることと、それから美術品を身近にお届けするにはどうするかを考えております。
もうひとつは、皆さんが見る展覧会というものは、通常は入場者数の多さでランキングされるのを、そうではなく、入場者数は少なくても、その地域で非常におもしろい展覧会を一生懸命やっている、そういうひとたちを顕彰する「秀逸企画賞」を年に一回設けております。

井田：
今回、「粋・古美術オークション」で監修されたきっかけは何だったのでしょうか？

河合：
協会の設立の趣旨というのは、本物の美術品に多くの方が気軽に、安心して接することができることを目的にしています。けれども、古美術は真贋の問題があったり、古美術商も一般の方が入りにくいような門構えになっているものですから、いろいろ考えておりまして。

そのなかで、アイアートさんに着目して、我々評価委員の目を通してオークションという形でやることで、多くの方に古美術に気軽に接していただけるチャンスにしたくて、こういう企画をしてみたんです。選考委員先生方、このタイトルにもあるように、みんな粋な方たちですから（笑）。どうぞ皆さん、期待してオークションに参加してほしいと思います。

安村：
古美術品に関しては保証といいますか、昔はいわゆる鑑定書を書く方がいらっしゃったんですが、今はもう鑑定書自身が意味をなしてないと。じゃあ、どうすれば一般の人は安心して買えるのかということで、今回は当協会が監修することになったんですね。

井田：
先生方が作品を観る時にいつも大切にされていることはなんですか？

河合：
そうですね。我々が美術作品を見る時に大切にしていることは、自分の感性で見分けるということなんですよ。ほんとうに偽物本物というのは神様しかわからないけれど、大切なのは自分の目で自分の感動したものを手に入れてほしいし、そういうものに触れるということが一番大事でね。我々もそれをモットーにして作品に触れるようにしているんです。

安村：
やっぱり、見た時の感性ですよね。自分の感性が非常に重要で、そこに美術品の難しさもあると思うんですよね。

井田：
現在、古美術の分野では浮世絵版画が評価されていますが、先生方はそれについてどう思われておりますでしょうか？

河合：
浮世絵の芸術というのは、それ以前の平安や室町時代の芸術の鑑賞層は貴族だけだったのが、近世になると庶民にまで広がって、その広がりのなかで生まれてきたわけです。決して外国人が評価したから、すばらしい芸術と認識されたんじゃない。庶民もやんごとなき人も浮世絵が好きだった。そういうことからすると、世界でさらに評価が高くなっていくってことはあると思いますよ。実際に昔、オークション会社の人が「浮世絵が１億しないのははずかしい」といって１億で売ろうと頑張っていて。彼は「レンブラントやデューラーの版画は１億以上ですよ」というので、僕はそれなら頑張れと。幸い最近、北斎の富嶽三十六景のうち神奈川沖浪裏が１億数千万円で売れたので、結構結構ということで。
浮世絵が今後、世界中で芸術としての評価ということと同時に、経済的な評価も高くなって、浮世絵を死守しようとする日本人も多くなってきていますね。
それはいいことだし、浮世絵に世界中の人たちが注目してくれると大変結構なことだなと思っています。

安村：
浮世絵版画の場合は、なんといっても数が多いことですよね。平安時代や鎌倉時代のものは肉筆で一点物ですから、ほしいと思った人がいても市場に出ない。ところが版画の場合は、ほしいと思えば本物が今でも出るわけです。
それもひとつですし、庶民とか幅広い層に受け入れられた浮世絵版画ですから、世界の人たちも鑑賞しやすいんですよね。平安や鎌倉ものは貴族とか特定の人しか鑑賞できなかったけど、浮世絵は武士をはじめ庶民もあらゆる人に愛されて、その評価を受けてきているわけですから。それなら当然世界の方、知識のない方も目で見ただけで鑑賞できる。その魅力があるんじゃないですかね。

河合：
明治時代、浮世絵は価格が安定して多量にあったので、美術商たちがかき集めて、輸出品にしたわけです。それで、外国の市場に日本の浮世絵がたくさん出たから、いわゆるジャポニズムという日本趣味の人たちが、浮世絵をとおして日本美術を評価したということになる。研究者によると８割以上が外国に行ったということですけれども、まだまだ日本にも残っているので、日本のコレクターたちは手に入れやすい対象になる。我々美術史の研究者も、研究対象が豊富にあるから、今後も浮世絵の研究が盛んになると思いますね。

安村：
たしかに浮世絵は明治時代を主として、外国にものすごく売れてるんですよね。ですから、欧米その他に紹介されていない個人コレクションが山ほどある。そんなこともやっぱり、大量に生産されたってことが大きなポイントですよね。

井田：
浮世絵はそのような流れを汲んでいるかと思いますが、今後はどういった古美術が、日本や世界で評価されていくべきだと思いますか？

河合：
外国人もだんだん日本の美術を理解するようになったので、どの部分が外国にもてはやされるか、これがこれからの売りだということはないと思うんです。ただ、日本の美術がよく言われるのは「デザイン性」ですよね。装飾的、デザイン的な特色として優れているので、そういうものが受け入れられていくと思う。ですから、琳派の非常に優れたデザイン性のように、我々の仲間である評価委員の河野元昭さん（静嘉堂文庫美術館 館長）がいう日本の美術のシンプルさ、簡潔性とか単純性といった特色が、外国人は受け入れやすいと思うんです。それから、伊藤若冲が描いた鶏なんかも、あれは一見リアルだけど、まったくデザインなんですね。ああいうものに、河野さんがいう日本のシンプルシティとデザイン性を見るわけですね。で、外国人はこれは日本らしいものだ、西洋にはないものだといって受け入れる。西洋と同じことをやっても、彼らは別に驚かないわけです。

安村：
西洋の絵画は、三次元の現実世界を二次元の画面に移し替えようとする意図があるんですよね。ところが東洋では、中国にも西洋の空気遠近法は伝わるけど、当時の中国人は相手にしないんですよね。日本人もほとんど取り入れない。海外とちがって、日本は構図のおもしろさといったところに熱中するので、デザイン性が重要になってくる。そういう発想が、欧米とはちがっておもしろいですよね。中国と日本もちがって、中国はさらに独特な見方で三次元を表現しようとしますけれども、日本はどうも三次元を意識しないんですよね。

河合：
浮世絵もそうですね。だから、浮世絵を外国人が見てびっくりするのは「影がない」というね。まあ、外国の影響を受けて、広重や国芳が西洋画風に描こうと、影を入れたりはしましたけれど。
ヨーロッパ、あるいは中国でも、物を立体でつかむために、影が大事なんですよね。そういう影がなくても、日本では絵になるというのが、驚きなんですよね。

井田：
今回出品作品 23 点のうち、気になった作品はございますか？　またその理由もありましたら、ご一緒に教えてください。

河合：
気になった作品はいくつもありますけども、青木木米ですね。重要美術品に認定されているという観音さん。よく出てきたなと感心しましたし、青木木米はほとんど山水画しか知られていないけれど、そういうなかでかなりしっかりした作品だと思います。それから、西洋・中国を通して日本に入ってきた、影を使っているという、技法的にもたいへん興味深い。
三十六歌仙の屏風も、17 世紀までさかのぼるような優れた作品でなかなか。浮世絵の祖といわれた岩佐又兵衛のスタイルを継承した、このクラス物は最近は出てこないだろう、と。

安村：
私も木米にはびっくりしましたね。なんて言っても、篆刻の書体で書いてある。木米の字でこんなの見たことなくて。この人は篆刻家ですから判子を彫るプロですけども、判子の書体を書いたこともびっくりしましたし。それと、ある時期まで知られていて重要美術品になっているのに、一時期から行方不明になって、また出てくる。そういうところに、流通界のおもしろさを感じる。
あと、私自身が非常におもしろいなと思ったのが、酒井抱一の光琳百図にある図をそのまま描いた烏の水墨画ですね。抱一は、尾形光琳という琳派の大成者を顕彰しようとして光琳の作品を集めて「光琳百図」という本を作るんですね。その本のなかで評判がよかったり、光琳と同じものがほしいという人に、抱一がそっくりそのまま描いてあげるんですよね。
ですから、そういったものの一つが出てきたというところで非常に興味をもちましたね。

河合：
それとちょっと、木米がご存じのとおり、文人画ですよね。今回のオークションには、蕪村などの文人の作品が出ています。
現在、一般的に文人画は人気がないというか。僕も、文人画の良さを伝えなきゃいけないと展覧会をやったりしましたけど、全然人が入らないんです。そうなると、オークションでも出てこなくなるわけですよね。そういうなかで今回、我々の目を通してというとちょっと自慢になりますけど、一応専門的な立場で、それぞれ特色があって、これはおすすめできるという作品が出品されているので、これを機会にコレクターの方、作品を集めてみたい方に、ぜひ関心をもっていただいて、文人画の良さを再認識してくれれば、大変意義があると考えています。

安村：
ひとつの買うきっかけとなるといいですよね。

河合：
そういうのが機会になって、また売れるとなると作品が出てくるんですよね。関心がないと全体に情報がなくなって、関心をもってくれると次々に出てきてくれると。木米は何十年ぶりに偶然出てきたけど、まだまだ埋もれている作品もあると思うので。
もうひとつ付け加えるなら、この木米ほど濃密な作品じゃないけど、サラッと描いた文人の余技的な性格が表れた作品にも注目していただけたらなと思います。

安村：
やっぱり売れるということは重要なことですね。ある作家の展覧会をやってカタログを作ると、骨董屋の人たちが喜ぶんですよ。それを基本にして、こういうのありませんかって全国を回るんです。そうすると、ああこれならうちの蔵にあったとか、そこで気づいて出てくる。流通界が活性化するということは、根本的にその人の作品、木米なら木米の作品の底上げになるんですね。今まで知られていなかったものが出てくるかもしれない。そういうおもしろみがあって、昔みたいに流通界と美術史研究者が一緒になってジャンルを盛り上げていたように、その世界をもう一度私は再現したいなと思っているんですよね。

井田：
最後に、協会はさまざまな活動をされていますが、今後どのような取り組みをされていく予定でしょうか？

安村：
申し上げたように、より身近に安心して買える、おすすめできるような活動ということで、今回アイアートさんと一緒にやる仕事が第一歩ですね。これの結果を見て、また次の試みはできないか、というふうに考えている次第ですね。

河合：
身近に美術品に触れる機会を皆さんに提供していきたい。そういう趣旨で始めた協会ですから。
今、現代美術はかなり人気があって、若い人たちにもコレクターが増えています。現代美術は今生きている人が描いているけど、古美術の場合は本物か偽物かというリスクがあるんですよね。ネットオークションとかは一種の掘り出し物探しみたいなところがあるけど、我々はそうではない。賭けじゃなく安心して手もとに置ける、そういう情報をアイアートさんと協力しあって提供できたら、鑑賞あるいはコレクター層に厚みが出てくれれば大変いいと思いますね。

安村：
今おっしゃったように、安心感ですよね。この作品だったら楽しんでいただけますよというのを協会で保証するといいますかね。そのための今回の協力なんですよね。

河合：
繰り返し申し上げるけども、その作品に接する方の感性で求めていただければ。基本は自分が楽しめる、自分の感性に合ったものが見つけられるといいですね。そのためには、皆様の感性に少しでも貢献できるようなものを、私たちは最大の努力をして、今回は 23 点を提供しますという形でやってゆくことになると思います。
コレクターの方が感性を磨いたり、経験を重ねていきながらより良い作品に触れるチャンスのために、お手伝いすることに努力を惜しむことはないです。
本物より良い偽物なんてありえない。それをご自分なりの目で選ぶということ、それが一番楽しいんじゃないかと思います。

2022 年 6 月 13 日
アイアート株式会社にて